周辺からの記憶 31

チェルノブイリを訪ねる 2019 年 9 月

村本邦子(立命館大学)

蘭・小倉・今野(2021)『なぜ戦争体験を継承するのかーポスト体験時代の歴史実践』(みずき書林)がとても面白かった。広島の基町高校の原爆の絵の試みをはじめ、戦争の体験世代とポスト体験世代が出会い、協働しながら継承のための新たなプロダクトを作っていくさまに感銘を受けた。同時に、ここ十年から二十年の間に全国のあちこちに継承のためのミュージアムが生まれていることを知った。

ゴールデンウイークは緊急の要件があって鹿児島にいたので、リニューアルされた知覧 特攻平和会館と、人吉海軍航空基地資料館、万世平和特攻祈念館を訪れた。知覧には何度も 足を運んできたが、鹿児島には多くの陸海軍基地があったということは今回初めて認識し た。吹上浜にみどり荘という秘湯旅館があり、特攻隊関連の資料が展示されているのだが、 万世基地の接待宿だったからなのだと初めて結びついた。吹上浜海岸は比較的馴染みのあ るところだが、ここに滑走路があったのだ。

こういった記念館は、地域の人々の歴史掘り起し運動から生まれている。国ではなく、地

方自治体(もしくは民間)が設置するので、地域 住民の視点が見える。ミュージアムは誰がどう いう目的で設置するかによって展示内容も異な ってくる。歴史から民衆の声が消されようとす る時、かすかな声を聴き歴史を取り戻そうとす る動きが生じるものだ。原発事故にしても、ホロ コーストにしても、戦争にしても、そんな草の根 からの揺り戻しの力に期待したい。福島にも複 数の民間ミュージアムが立ち上がりつつある。 近いうちに行ってみたい。



コミュタン福島の衝撃

昨年、福島県三春町にあるコミュタン福島(福島県環境創造センター交流棟)を訪れた。これは、2016年にできた福島県の施設で、「県民の不安や疑問に答え、放射線や環境問題を理解し、環境の回復と創造への意識を深める」ことを目的にしている。入場無料であるにも関わらず、とても立派な建物で、中はまるでテーマパークのよう。これまで見てきた原発 PR センターに似ていた。

「子どもたちのメッセージ」のコーナーには、可愛いイラストとともに「とても楽しかったです」「コミュタン最高」「放射線とうまく関わっていきたいです」といった感想が並び、キーボードでメッセージを入れると壁面の巨大スクリーンにそれが映し出されるようになっている。

「未来へのメッセージ」にも、楽しかった、素晴らしいといった言葉がカラフルな文字で流れていた。試しに、「原発安全なの?」と打ってみると、「原発安全」と映しだされた。驚いていろいろ試してみたが、「怖い」や「不安」の語は消され、壁にはポジティブな言葉だけが並ぶ。どこかでモニタリングしているのか、そうこうしているうちにスタッフ数人が集まって、こちらを見ながらどこかに電話していた。あまりの衝撃に怖くなって、その場を立ち去った。

「どうして書き込んだ文字が消されるんですか?」と尋ねるべきだった。回答に納得がいかなければそれに意見を言うという普通のことがどうしてできなかったのかと、自分が情けなく、後で落ち込んだ。

その後、福島大学の後藤忍先生を訪ねた。 科学者として原発反対を言ってこなかった ことに責任を感じ、放射線に関する教材や 博物館展示などについての批判的研究を続 けておられる方だ。博物館展示を比較分析 し、チェルノブイリ博物館の展示は、原発事 故を二度と起こしてはならないというメッ セージを強く感じさせるものであるのに対 し、コミュタン福島は、汚染の程度や被ばく による人権侵害の状況について判断するの に必要な情報が少ないという。

「意見を言っても取り上げてもらえないことも多いが、言ったことで展示が変わったところもある」そうだ。そして、「チェルノブイリ・ミュージアムは長い時間を重ねながら、市民の努力があって、展示内容を変えてきた。福島のミュージアムも、時間をかけて私たちが変えていかなければならない」と言う。この言葉に刺激を受け、チェルノブイリに行こうと思った。





キエフへ

2019年9月、アムステルダム経由でキエフに飛んだ。キエフはウクライナの首都、ドニプロ川の中流に位置する。東ヨーロッパにおける最古の都市で、キリスト教の聖地のひとつとなっている。街中には美しい教会が建ち並び、聖ソフィア大聖堂とキエフ洞窟大修道院は世界遺産である。宿を取ったホテルウクライナは、マイダン独立広場の上にあり、旧ソ連を感じさせる堂々とした佇まいで、部屋の窓からキエフの街を眺望することができた。

独立広場には、ユーロマイダン革命の青空展示のミュージアムがあった。これまでウクライナのことをほとんど知らなかったと思う。2014年2月、ロシア寄りのヤヌコビッチ大統領が欧州連合(EU)と連合協定を結ぶ協議を打ち切ったことをきっかけに、政権の腐敗に異議を唱え、民主化を求める市民が立ち上がり、この独立広場を占拠して治安部隊が衝突した。

死者は百人を超えたが、新たな政権の発 足や 2004 年憲法の復活、数ヶ月以内の臨時 大統領選挙の成し遂げなど多くの成果をあ げ、ウクライナに大きな変化をもたらした。 しかし、結果的に、ロシアの猛反発を招き、 軍を送ってウクライナ領クリミア半島を併 合、東部各地で新政権支持派と反対派が対 立し、国際的紛争の火種となってしまった。

ウクライナの街は非常に美しいが、眼を 凝らすと、ウクライナが激動のさなかにあ ることを感じさせられる痕跡と出会う。









国立チェルノブイリ・ミュージアム

国立チェルノブイリ・ミュージアムへ





1986年4月26日、ソビエト連邦(現ウクライナ)のチェルノブイリ原子力発電所4号機で、大規模な原子力事故が起こった。事故当時、4基の原子炉が稼働しており、5号機、6号機の建築が進められていた。事故前日、4号機では停電時の電力供給実験が予定されていたが、制御棒の設計ミスと操作ミスが重なり、メルトダウン。二度の水蒸気爆発が起き、炎が減速材に使われていた黒鉛に引火した。鎮火までの十日間、放射線

物質が放出され、広範囲に拡散した。事故に 対応した作業員 28 名が急性放射線障害で 亡くなっている。

国立チェルノブイリ・ミュージアムは、原発事故 1 年後の 1987 年、事故現場の消火活動にあたった消防士たちをたたえる小さな写真展「勇気と栄光の記憶」から始まった。写真展示は消防のオフィスで行われたが、その隣の消防署が博物館にあてられた。

ソビエト政権下では、国威発揚のイデオロギーと結びつき、消防士は英雄扱いだったが、亡くなった原発関係者のことや移住や強制避難などの問題については公式に語られることがなかった。だんだんと国外の視察団も訪問するようになり、1992年に博物館へと組織を拡充することになった。

1991年、ソビエト連邦が崩壊し、ウクライナが独立すると、機密文書の公開が始まり、破棄を命じられていた多くの資料も展示されるようになった。開設当初は200点だった展示品も、現在では、総面積1100㎡の三つの展示室に7000点以上が公開されている。機密文書の多くは、ここで最初に一般公開された。(コロレーヴスカ, A. 「責任はみなにある」東浩紀『チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』ゲンロン, p.94-97、2013)。

さっそくミュージアムに向かってみる。 チェルノブイリ・ミュージアムは、事故地から約百キロ離れたキエフ市の中心部に位置する。アクセスは良いが、大きな看板があるわけでなく、博物館らしくない外観なので、注意しなければそれとわかりにくい。元消防署だったことを表すように細長い2階建ての建物で、玄関部分は、見張り台だったのか3階建ての塔のようになっている。元か らではないのだろうが、現在は、全体が淡い クリーム色に白い縁取り、木製アーチ型の 扉と窓で、洒落た印象を与える。玄関入り口 に、キリル文字と英語で、「国立チェルノブ イリ博物館」と書かれた地味な表札がかか っていた。玄関横には、樹木と祈りを捧げる 女性の銅像がおかれた小さなスペースが作 られていた。心安らぐスピリチュアルな雰 囲気を感じさせる。なお、建物前の駐車場に は、古めかしい感じの車両が並んでいたが、 実は、これらが事故当時に使われていたも のであることは後で知った。





玄関を入ると、受付がある。入場料は24UAH(フリヴニャ)、音声ガイド60UAH、写真撮影料48UAHで計132UAH、日本円に換算すると約600円である。音声ガイドは、英語、ドイツ語、日本語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ロシア語、ウクライナ語の8ヶ国語が準備されていた。

ミュージアムの公式 HP には日本語版もある(http://chornobylmuseum.kiev.ua/ja/)。それによれば、「ミュージアムは、事故処理作業員や事故の証人たち、犠牲者といった何千もの人々の運命を通して、この事故がどれほど大きなものだったかを理解してもらうため、人々の役に立つことが使命だと考えています。そして、文明と地球を危機にさらした科学技術と人間との共存はかけがえのないものであるということへの理解を促し、世界がチェルノブイリの教訓を忘れないよう、生活のあらゆる場面で事故の教訓を活かせるよう次世代に警告していきます。」とある。

言語のこと

私には、ウクライナ語とロシア語の識別が難しいことから、展示にどちらの言語が使われているのかわからず、後で調べてみた。基本的に、展示資料は旧ソ連時代のものであるため、ほとんどがロシア語であるが、展示解説はウクライナ語になっているようである。

ただし、ここには注釈が必要だ。2016年に訪れた人の話によれば、その時の展示解説はロシア語だったという。どこかの時点でロシア語からウクライナ語に書き換えられたのだと考えられるが、現地の日本語ガ

イドに問い合わせてみたところ、「チェルノブイリ博物館の展示の説明は、もちろんのことウクライナ語です。ウクライナ国によって創立された国立博物館なので、館内の展示品の説明看板上で使う言語も、博物館内の見学時のガイドさんたちが行う言語も、原則としてウクライナ語でなければなりません」とのことで、書き換えの時期ははっきりしなかった。

言語の問題は政治的である。ウクライナは、ソ連時代にロシア語化が進み、独立時にウクライナ語を唯一の公用語として指定した。政府機関ではウクライナ語のみが使われ、憲法・法律をはじめ、公的文書はすべてウクライナ語で記述され、学校教育は大半がウクライナ語で行われる。しかし、生活の現場でのロシア語の使用頻度は低下しておらず、西部を除いた地域においては、ロシア語は重要な言語となっている。

ウクライナはバイリンガル社会であり、 ウクライナ住民の96%がある程度ロシア語 が使えるという。社会学研究所による2000 年のアンケートによると、「家庭では何語で 話しますか」の質問に対して、ウクライナ 語のみと回答したものは39%、ロシア語の みと回答したものは36%、状況により使い 分けると答えたものは 25%となっている。 歴史的にポーランドなどの影響下にあった 西部はウクライナ語が、東部や南部はロシ ア語が優勢である。(芳之内雄二「ウクライ ナの現代言語状況と言語問題」北九州市立 大学文学部紀要 74 号、47-61 頁、2008)。 既述したように、東部では、親ロシア派勢力 が一部地域を 2014 年から実効支配し、政府 軍とにらみ合いが続いている。

こういった政治状況と関わらず、ミュー

ジアムの HP は、ウクライナ語、ロシア語、 英語、日本語の 4 ヶ国語、音声ガイドは 8 ヶ国語になっている。そこには、チェルノブ イリの教訓を世界に発信したいという強い 意志がうかがえる。実際、この博物館は世界 中の若者に愛され、近年ではデートスポッ トとしても人気を集めているとのことであ る。驚くべきことだ。

受付を済ませて展示室に足を踏み入れる と、最初に眼に飛び込んできたのは、なんと 福島原発事故の展示だった。



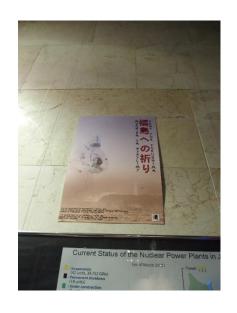
福島原発事故の展示

左手正面つきあたりには、福島原発事故の映像が映し出される液晶画面が、その両側に、ウクライナ語(左)と日本語(右)で書かれたメッセージが展示されていた。「桜の枝ー煙の美女/この枝に歩み寄って、/優しく抱きしめる。/チェルノブリから/宜しくと伝えておく。/桜が息で返事をする。/全世界が悲しみに暮れ、/皆が心配になり/祈りが天国まで響く/その中に私たちの声:/私達はあなたと共にいる。/桜―私たちの姉妹。/傷が癒されるように/祈りを捧げてい

る。/諦めないで!/あなたの兄弟/キエフの 栗の木より」。天井から、桜を背景に白い衣 装を身に着け飛翔する女性のように見える 人形が吊り下げられている。福島は女性で、 チェルノブイリは男性で表象されているの だろうか。



左手正面に向かって右の壁には、「福島へ の祈り | と書かれたちらしが貼ってあった。 2013年7月9日から開催されている特別展 で、終わりの日付は書かれていない。ミュー ジアムの公式 HP によれば、これは、ウク ライナ発の福島の写真と伝統工芸品の展示 であり、注目すべき展示として、被災地の武 士の志を引き継ぐ物語があり、千年以上続 いていた相馬野馬追の写真に、避難者であ る野馬追の武者たちの勇敢な姿を見ること ができる。ホール中央にあるその武者の姿 とチェルノブイリ被災地の民族衣装を着た 女性の絵は、原発事故の悲劇を克服する二 つの民族のシンボルである。写真家、ジャー ナリスト、被災者、ボランティアなど36の 個人と団体が撮影した 120 枚の写真と、福 島県内の被災地の文化や伝統工芸を伝える 展示品、避難区域や放射汚染地域の地図、事 故当時の様子がわかる新聞などを展示して あると説明されている。私たちが見た展示 内容からすると、「福島の祈り」は内容をア ップデイトしながら、常設化しつつあるの かもしれない。

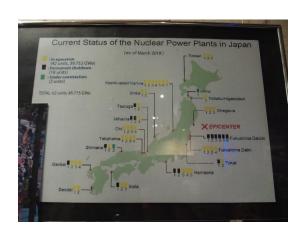


ちなみに、HPによれば、2017年3月11日から9月1日には「ウクライナから福島連帯の起き上がりこぼし展」が開催されている。福島県会津地方に古くから伝わる郷土玩具起き上がりこぼしは、東北人の七転び八起きの不屈の精神を表しているが、ウクライナにもこれに似たネバリャーイカというものがある。パリで活躍するデザイナー高田賢三が呼びかけ人となり、広島の再生紙を使って、会津で作られた無地の起き上がりこぼしに世界中のアーティストが絵付けしたものを展示するという企画だったそうだ。

ちらしの下にはパネルがあって、英語で

「日本における原発の現在の状況」と書かれた日本地図が示されていた。「2018 年 3 月現在」とあるので、毎年、更新されているのだろう。この時は、稼働中 42 基 ("in operation"と表現されており、停止中のものも含まれているのではないかと思われる)、廃炉 18 基、建設中 2 基と表示されていた。その下には、2011 年 6 月 11 日と 2012 年 6 月 29 日の原発反対デモの写真と共同通信の記事が貼られていた。

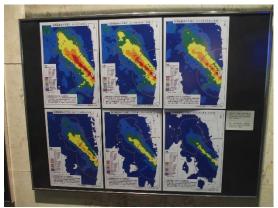
その他、除染完了後の公園の写真 (線量計は 1.685μ Sv/h を示している)、放射線量の





変移予測地図 (2012 年、2013 年、2014 年、2017 年のものの他、2022 年、2032 年のものも含まれている) もあった。2032 年のものでは、たしかに赤い部分($100\,\mu\,\mathrm{Sv/h}$ 以上)はほぼなくなっているが、黄($20\text{-}50\,\mu\,\mathrm{Sv/h}$)、緑 ($10\text{-}20\,\mu\,\mathrm{Sv/h}$)、青 ($5\text{-}10\,\mu\,\mathrm{Sv/h}$)は残っている。また、被災した自宅や仮設住宅などとともに避難家族の写真もあった。





















左側の壁には、双葉町の「原子力明るい未来のエネルギー」の看板や白い防護服を着た作業員、地震・津波被害の新聞記事、津波後の光景と鯉のぼり、原発サイト、甲状腺検査を受ける子ども、積み上げられた除染土、柿や桃など福島の農産物を含む風景の写真なども展示されていた。

なお、鯉のぼりの鯉は、実物が天井にも並んで展示されていた。これは、鯉のぼりを復興になぞらえた福島大学の「鯉のぼりプロジェクト」より寄贈されたものということだ。







チェルノブイリ原発事故の展示

1 階の展示スペースには、ウクライナの 民族衣装を身に着けた小さな人形たちが展示されているが、天井には、原発事故によって消滅した村(強制避難区域)の標識とともに、鯉のぼりの鯉が吊られており、それらは右手の階段の天井に続いていく。詳細な説明はなかったが、チェルノブイリと福島のイメージを融合させ、原発事故を人類の普遍的テーマへと視覚化しているようにも感じられた。

階段の段には、大きなリンゴの木が描かれ、方々に細かく枝分かれし、たくさんのリンゴの実がなったり、落ちたりしているようだ。リンゴの木のイメージは、後の展示でも再現され、チェルノブイリのシンボルのようである。エデンの園の知恵の木を表しているのかもしれない。

大きく伸びる枝が避難住民を、なった実が次世代の子どもたちを意味し、離散(ディアスポラ)のイメージという説明もある(東浩紀「チェルノブイリ博物館」東浩紀『チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』ゲンロン, p.44、2013)。

階段を上り、後を振り返ると、標識の村の 名前にはすべて赤の斜線がひかれていた。 事故で消滅した76の村である。



二階に上がると、左右の展示室(入口は別だが、奥でつながっている)と、正面に大きなホールがある。右側の展示室に入ると、薄暗い中に青いライトに照らされて、消防士や作業員たちの等身大人形と、事故で止まった1時23分を示す丸い時計が天井から吊るされており、一瞬、ぎょっとする。よく見ると、人形と一緒にたくさんの写真が並べられている。犠牲になった消防士たちだろう。ここは、「事故の夜」がテーマである。事故前、事故当時、事故後のチェルノブイリ発電所のジオラマもあった。









天井にも壁にも、ショーケースにも、所狭しと写真や資料、遺品などが展示されている。オーディオガイドや英語で読める説明からわかるのは、原発事故がどのように起こったのか、事故当時の原発内の様子、命がけで事故収束にあたった人々、当時のソビエト連邦政府が事実を隠蔽したために起きた悲劇、殉死した人々の人生の物語、責任をかぶせられて罪を問われ、最終的に名誉回復した人たちなどについての情報が展示されていた。

夥しい数の顔写真、関連のドキュメント、ID、勲章、衣服、眼鏡、手紙、日記などの遺品もある。殉死した人々には、放射線の危険を示すときに用いられる黄色と赤の小さなバッジがおかれている。英語の説明は限定されているが、展示を見れば、その人が消防士だったのか、作業員だったのか、看護師だったのか、どのような状況で事故収束と関わったのかが推測できるようになっているし、これまで公開されてきた書物やドキュメンタリー映像などで見聞して、誰と特定できる人々もいる。事故当日の指令室を描いた手書きの絵もあった。











事故直後、火災を消火し、がれきを取り除 き、汚染廃棄物を地下深くに埋める事故処 理作業があった。遠隔操作のブルドーザー やロボットなどは電気回路が放射線で故障 してしまうので、人間が直接作業にあたる しかなかった。旧ソ連は、この作業のため、 現地に600万人を送り込んだ。これらの作 業にあたった消防士、兵士、作業員、鉱夫た ちは、「リクビダートル(ロシア語で後始末 をする人の意味)」と呼ばれるが、それらの 作業には、非常に高い放射能被爆(レントゲ ン撮影の約 1200 倍といわれる) が伴う。 当 然、それは致命的なもので、急性放射線障害 で亡くなったり、後に癌を発症したり、病気 や障害を抱える人々があった。爆発ととも に、発電所内にいた 2 人が死亡し、急性放 射線症候群と診断された救急隊員 134 人の うち、28人が数カ月以内に亡くなった。そ の後も、少なくとも 19 人が死亡した (BBC NEWS JAPAN 2019年4月26日)。

当初、旧ソ連はこの事故を隠し、事故から2日後の4月28日、スウェーデンの原子力発電所の職員の靴から高線量の放射線物質が検出されたことがきっかけとなって、西ヨーロッパで異変に気付かれることになる。スウェーデン政府の外交官がソ連政府に、原子力事故が発生した事実がないか問い合わせたが、ソ連政府はその可能性を否定、国際原子力機関(IAEA)に報告する意向を伝えると、一転してチェルノブイリ原発で事故が発生した事実を認めた。

1986 年にソ連政府が国際原子力機関に 提出した報告書によれば、事故の原因は運 転員の規則違反の積み重ねで起こったとさ れ、これに基づいて非公開裁判で 6 名が罪 を被り、服役させられた。1991 年にソ連最 高会議の要請で行なった再調査での報告書では、人的要因は濡れ衣で、原子炉の欠陥が原因であると結論を出した。

反対側の壁には、写真パネルが並べられ、 「チェルノブイリ 怖れと悲しみ」「チェル ノブイリ 悲劇」などとタイトルがついて いた。たとえば、「チェルノブイリ 怖れと 悲しみ」のパネルには、「私は究極の怖れと 悲しみを感じる。人類は核を持つべきでは ない。ええ、たしかに、アートは人々の心を 変える力があると思う」とメッセージが書 かれており(これは英語で表記)、過去の企 画展のものかもしれない。そのなかには、永 井一和のメッセージが重ねられた原発の写 真も展示されていた。「チェルノブイリ記念」 と題されていて、「チェルノブイリ事故記念 日に、"汝殺すなかれ"のポスター展から2枚 のポスター写真をメールする。それを見て、 命の大切さを心に刻んでもらえたら幸いで ある」という内容である。日付は入ってない が、おそらくは事故後比較的初期の記念日 であろう。















入口に近い方はパーソナルな展示が主となっているが、奥の方に進むと、もう少し集合的な記録が扱われている。事故処理の現場を記録した映像とともに、防護服を身に着けた等身大の人間が置かれており、鎧のように、胸と性器の部分に放射能を遮るよう鉛のベストをあてている。放射線量があまりに高く、作業は2分が限界だったという。

その他、放射能測定器、汚染を表す地図な ども展示されていた。チェルノブイリ原発 事故の報道に関する当時のソ連と世界各国 の新聞記事が並べられ、比較できるように なった展示もあった。旧ソ連がいかに情報 操作したかがよくわかる。







事故前後のプリチャピの街の様子、避難の様子、避難を拒む住民などの写真や映像もあった。放射性物質の探知機も低維持されていた。ウクライナでは、もともと毎時 $0.2\,\mu$ Sv だった放射線量が、場所によっては、事故、 $15\,\mathrm{m}$ Sv にまで達していた。キエフ市内では、 $5\,\mathrm{fl}$ 1日にメーデーのパレードがあって、住民たちは何も知らないまま参加していた。音声ガイドは、子どもの甲状腺癌が 2010 年時点で 6,250 例報告されていると言っていた。天井からは、赤や緑や青で彩られた大きな旗がたくさん吊られていて、事故処理に駆り出され、今は旧ソ連から独立した国の国旗なのかもしれない。一番奥には、事故のジオラマがあった。





奥からさらに進んでいくと(階段から左 側にある展示室へとつながっている)、赤、 青、緑、黄、紫と色を変えながら照明をあて られた大きなリンゴの木の造形があった。 リンゴの木は、小さなベビーベッドと思わ れるものを突き抜け天井に向かって伸びて いた。枯れているのか葉はついていない。地 面には、地層のように、たくさんの家族写真 や木製のフレームが重ねられ、所々に真赤 なリンゴの実が落ちている。リンゴの木の 枝にも家族写真が吊られ、木を囲む壁には、 フレームに入った家族写真が飾られている。 これらは、立ち入り禁止地区に残されてい た写真だそうである。禁断の実を食べ、生命 の木を枯らしてしまった人間の軌跡であろ うか。おどろおどろしい雰囲気を感じる。











その隣には、チェルノブイリ周辺のジオラマや事故後の写真があったが、テレビかビデオの教育プログラムなのか、撮影中で、近づいての観覧はできなかった。プリチャピは、原発から30キロ圏内にあり、4月27日に避難勧告が出て、たくさんのバスが出て、数時間の内に避難が完了したが、避難内容は知らされず多くがキエフに避難し、そのまま帰れなくなった。それ以外の地域の避難が決定し6日に完了、総数11万6千人が避難した。出口近くにも、今やゴーストタウンと化したプリチャピの写真がたくさん飾られていた。

それから世界のアーティストたちによる 大きな絵画や刺しゅうなどの展示や、医療 者や検査を受ける子どもたちの写真があり、







松の木が放射線を吸収したためにキエフの 被害が軽減されたという松の枝の標本があった。松の木はオレンジ色に変色し、「オレ ンジの森」と呼ばれるようになったという。





動物の奇形は 3 倍になったとのことで、頭がひとつ、胴体がふたつで生まれた子豚の標本と写真、研究論文のようなものが展示されていた。子豚は、放射線量が高かったジトミール州で、事故の 1 年後に生まれたものとのこと、恐ろしくて目を背けたくなる。それから、子どもたちの診療に用いられた器具や白衣、診療の写真の展示があり、出口近くには、立入禁止区域内から避難する人や、事故処理にあたった作業員たちが使用していた放射線測定ゲートの実物が置かれていた。



最後は、広島、長崎に関する展示で、ガラスケースの中に、原爆の写真と新聞記事、原爆ドームの写真、被爆者の絵、日本で出版された関連の書籍や新聞、イベントちらし、折り鶴などがあった。また、ユニセフや赤十字、交流のあるさまざまな国の市民団体との関係を示す展示があり、子どもを守る国際的な連帯を表しているようだった。







メインホール

左右展示室を出て、中央突きあたりのホール展示室の入口上の方には、またしても赤い斜線で消されたチェルノブイリの標識が飾ってある。木製のフレームは、立ち入り禁止となった教会のファサードである。 "Est dolendi modus, non est timendi"というラテン語が書かれていて、これは、HPによれば、 "There is a limit of sadness, anxiety has no limits." (悲しみには限りがあるが、不安には限りがない)という意味だそうである。



門をくぐると、広い空間が広がるが、全体 はやはり暗く、赤や青でライトアップして ある。中央の床には、事故を起こした原子炉 の屋根が実物大で再現されている。

象徴的表現で表されている空間の意味については、デザイナーに直接話を聞いたという東(2013)の説明を紹介する。最初に対面するのが、イコノスタシス(聖なる空間を区切る壁のようなもので、格子組のパネルにイコンがつけられている)であり、炉心の部分に入ると、左には聖ガブリエル、右には防護服で、防護服は、事故当時旧ソ連の書

記長だったミハイル・ゴルバチョフの名前 と聖ミカエルがつながり、ロシア正教のシ ンボルと原発事故のイメージが交差する仕 組みだそうだ。



炉心中心部には、ゾーン内で拾得したという木船とたくさんのぬいぐるみ、まるでゆりかごかノアの箱舟のようにも見える。





天井には原子炉素材で世界地図が描かれ、 原発所在地にランプが灯る。

正面壁画、モニター背後には、4号機原子炉の屋根と同じデザインで並べられたたくさんの子どもたちの顔写真がある。1986年、1987年に生まれたリクビダートルと避難者の子どもたちである。入館者は、被災した子どもたちに見つめられながら、ドキュメンタリー映画を鑑賞することになる。もう事故は起きないと安心して博物館を訪れる人々に、もう一度炉心のうえに立って考えてもらいたいという意図があるそうだ。





脇には、ガスマスクと防護服を着た 3 人の等身大人形が立っている。周囲には子どもたちや旧ソ連時代のウクライナの写真やおもちゃ、生活用品の展示、絵画。また、チェルノブイリ原発事故から、最初の 10 日間に、放射性物質を含んだ雲 (プルーム) がどんなふうにどこまで流れていったかが、時間経過とともに動画で展示されていた。なお、これは、公式 HP でも見ることができる。







チェルノブイリ・ミュージアムの特徴

このミュージアムの特徴は、非常に抽象 度の高いアートを使った展示が行われてい ることだろう。文化的背景をよく知らない 者にも、それらの展示は、圧倒的力でもって 情緒的な揺さぶりをかける。

このミュージアムをデザインしたアナトーリ・ハイダマカは、感情と象徴性を重視し、「詩を書くように展示する」のだという。同時に、問題提起を行う。たとえば原子力について、エネルギー問題は解決が難しい。リスクはあっても原子力なしではやっていけない。しかし、安全性を高めることはできたのではないか。「なぜ福島では、津波のことを考慮せず、海岸に原発を建ててしまったのでしょう。なぜチェルノブイリでは、3つの川の合流点に原発を建ててしまったのでしょうか。・・・展示を通して、こういうことを伝えていく」という。

彼の展示は、子どもの頃の記憶やおとぎ話、民俗的な慣習と結びついた象徴によるものなので、外国人にはわからないところがある。それでも、訪問客には確実に届いている手応えを感じるという。もちろん、資料とシンボルのバランスは必要で、書類や写真もある。メインホールにあるノアの箱舟のように見えるボートは、ボートも中のぬいぐるみも、いずれもゾーンから持ち運んできた立派な資料である。

展示のほとんどがロシア語もしくはウクライナ語になっており、訪問客は音声ガイドで説明を聞くことになる。2時間ほどの内容で、かなりボリュームがあり、充実しているが、それを聞いていると、展示が狙う情緒的反応に注意を向けることが難しく、ど

ちらかと言えば混乱するかもしれない。

副館長アンナ・コロレーヴスカによれば、この博物館では、子ども向けの特別なプログラムや大学生向けのシンポジウムや討論会を催している。キエフの中高教育機関の教員との協働プログラムで、生態学や生命の安全、気候などをテーマにしたり、元事故処理員の講演なども開催しているという。ウクライナには「生活の安全」という科目があって、学校教育の一環としての来館もある。たとえば、「エコロジーの授業」では、4つのテーマを立てたインタラクティブな体験学習があり、メインホールの原子炉を模したプレートの上に子どもたちが座り、話し合ったり、クイズ形式でゲームを行ったりする。

反応はとてもよい。原子力とは何か、さまざまなエネルギーを求めて生きた人間の軌跡を話たり、アニメーションを見せたりもする。ガイドは、「アトムおじさん」という博士の恰好をして、ゲーム感覚で会話をする。

展示品を管理するのは学芸員であるが、この博物館は文化省の管轄ではなく、事故処理に深くかかわった内務省の管轄であり、組織のトップは元事故処理インの警察官である。そのため、国家からの資金を獲得することができる。スタッフの給料は国によって支払われるが、それ以外の補助金はなく、展示拡張や個々のプロジェクトにはスポンサーを探すことになる。「この事故は人類への最後の警告であり、核軍縮や環境保全に対する戦いへの説得力ある最後のアピールとなるはずです。さらに、国際協力の発展において普遍的価値が優先されるべきことを教えています。」

この博物館は若者に愛されており、世界中の若者が何時間も滞在し、このミュージアムは開館から十年で120万人が訪れ、近年ではデートスポットとしても人気を集めているそうだ。その理由は、展示の7割がアーティスティックで哲学的な問いかけを行う手法にあるという。

なお、この節の上記情報は、東浩紀(2013) 『チェルノブイリ・ダークツーリズム・ガイド』(ゲンロン)に依っている。



※チェルノブイリ・ミュージアムについては、公式 HP のバーチャル・ツアーhttp://www.exhibitions.chornobylmuseum.kiev.ua

や YouTube などで観ることができるものが多くある。

National Museum Ch o rnobyl - YouTube -Bing video

チェルノブイリ立ち入り禁止区域 (ゾーン) へのツアーに参加する

チェルノブイリツアーについて

ミュージアムの HP には、「キエフの国立 チェルノブイリ博物館を訪問するだけでな く、悪化しているチェルノブイリ地区をご 自身の目で見て、自然がどう人工物を乗り 越えたかをご覧ください。」と博物館の「パ ートナーツアー会社」の紹介をしてある。

立ち入り禁止地区、通称ゾーンの見学は 1990 年代半ばに始まった。当初はジャーナリストや専門家を対象としていたが、徐々に一般観光客にも門戸を開き、2011 年からは観光地化が本格化していった。 2019 年 6月 10日、式典に出席したゼレンスキー大統領は、ゾーンを一般向けに解放するとの大統領令に署名し、ここを観光施設として整備し、積極的に活用することを決定した。

折しも、2019 年 5 月から 6 月にかけ、アメリカのテレビドラマ「チェルノブイリ」5 回シリーズが人気を博し、2015 年には 8 千人だった観光客が 2019 年の訪問客数は、6 月段階で 10 万人と予測された。

Williams (2007)は、チェルノブイリ・ゾーンへのツアーにおいて、プリピャチの町はある意味で生きたミュージアムであり、不気味な歩く劇場であると言っている

(Memorial Museum: Global Rush to Commemorate Atrocities. Berg)_o

チェルノブイリはウクライナの首都キエフから約 110 キロ北部の都市プリピャチ近郊にある。ウクライナ政府がエリアを管理しており、政府に登録している公式旅行会社のツアーに申し込む必要がある。ネット

検索するといろいろなツアーが出てきたが、 日本語通訳つきの日帰りツアーに申し込ん だ。事前にパスポートでの参加登録が求め られ、申し込みすると、「アミューズメント・ パークのような行動をしてはいけない、警 備装置の撮影禁止、地域内で物に触っては いけない、皮膚の露出は最小限に、屋外で飲 食しない」などの安全規則が送られてきた。 緊張する。

安全規則

この地域は遊園地ではありません。事故当時より 放射能レベルは著しく減少しておりますが、まだ非常に汚染されています。滞在中は安全規則に従うことが重要です。当規則はあなた自身、スタッフそして周囲の人々の安全性を高めることを目指しています。



アミューズメント・パークにいるように行動してはいけません。 この地域は原子力災害の発生場所であり、現在もまだ非常に危険です。 安全規則を厳守し 責任有る行動をとってください。



警備装置の写真やビデオを撮影するのはご遠慮ください。

自分撮りの際も、警察官、警備員、検問所、CCTV カメラ、身体保護システムの映り込みにご注意ください。



地域内では何も手で触れず、地面に座わらないでください。

汚染された何物にも触らないようにご注意ください。 地面に座ったり、膝をついたり、地面に荷物等を置いたりすると汚染 の危険が有ります。



被曝を防ぐため、皮膚の露出は最小限に留めてください。

板噪を切ぐため、皮膚の縁血は板小板に描めてくたさい。 地域内では、ショートパンツ、Tシャツ、スカート、その他、汚染され た地域に不適当な衣服を着用することは禁止されています。



地域に有る自然・人工物を記念品として持ち去らないで下さい。

それはあなたの健康にとって非常に危険であるだけでなく、法律によって厳しく禁止されています。



屋外で飲食しないでください。

食物と一緒に空気中の放射性粉塵を飲み込むおそれがあります。放射 性物質が体内に残る可能性があります。



アルコールや向精神薬を飲まないでください。

地域内では、飲酒や薬物の服用は禁止されています。あなたは冷静で 心身共に健康な状態でなければなりません。例外はありません。



指定された場所以外では、喫煙しないでください。 喫煙は火事の原因となることがあり、タバコの吸い殻はゴミとなります。

ご予約・お問い合わせ contact@chernobyl-tour.org

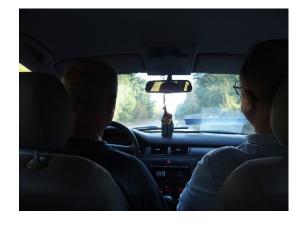
ければならなかったという。子ども時代、日本の4つの島の名前が気に入って、この言語を勉強したいと思い、中学の時、本屋で日本語のテキストを買って、授業中、こっそり勉強していたそうだ。高校の頃、モスクワで日本語を学び、日本に一度来たことがある。現地ガイドのセルゲイさんは、事故処理に関わっていた。福島の20キロまで行ったことがある。十周年には、環境省からの招待で日本に来るという。

ゾーンから強制避難させられた人は約20万人で、最も多いのがプリピャチ市の約5万人。次がチェルノブイリ市の約14,000人である。事故によって、政府の命令ですべての人が避難したが、1年で1,500人が戻った。公式には、帰ることは禁止されているが、サマショールとは、自ら決定して住むことにした人という意味である。みな高齢者だったため、今、生き残っているのは113人になった。ここに働く職員は7,000人いる。立ち入り禁止区域の森は、126,000~クタールあり、全部で12の検問所がある。注意事項を示す看板もあったが、ツアー参加申し込みに伴い送られてきた「安全規則」と同じ内容だった。

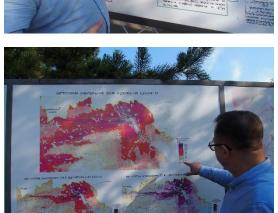
ゾーンへ

朝、キエフ市内のホテルでピックアップ してもらい、車で約2時間、居住禁止区域 のディチャートキ検問所に着いた。約30キ ロのチェックポイントだ。

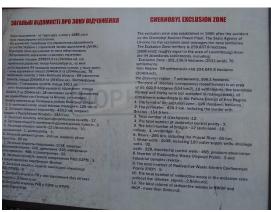
日本語ガイドのアレクセイさんは、事故 の時、5歳の男の子がいて、1年間避難しな















驚いたことに、検問所の手前には黄色いれ製ボックスのみやげ店があり、ガスマスクや防護服、マグカップやTシャツなどが売られていた。アメリカ人らしきグループが複数いた。検問官の写真を撮ってはいけないとのこと。検問所でIDチェックを受け、カード式の線量計を受け取って首からぶら下げる。舗装された一本道をずっと走っていくが、途中途中に、ミュージアムで見たような村の名前の入った標識がある。

ところどころに観光スポットと言える場所があるようだ。チェルノブイリと書かれたモニュメントの前で、ガイドから「ここで記念撮影をします」と言われる。言われるまま集合写真を撮るものの、かなり複雑な気持ちになる。いったいどんな顔をして映っ

たらいいのか。もともと原発には名前がなく、事故後にチェルノブイリの名前がつけられたが、実際には、チェルノブイリになかにあるわけではなく、原発から20キロ離れている。事故後帰宅してきた人が今でも住んでいるそうだ。







コパチ村で

さらに進むと、10 キロのチェックポイントがある。廃墟となったコパチ村で、ほとんどの建物は壊され土の中に埋められてしまったが、今なお残る幼稚園を見学する。車を止め、林の道を進む。道からはずれると林の中は放射線量が高いとのことで、ガイドが線量計をあてると 5.6 μ Sv/h ほどある。レンガ造りの建物の中に入ると、荒れ果ててはいるが、子どもたちの昼寝用のベッドが並び、絵本やおもちゃなどが散乱していた。













チェルノブイリ原発

コパチ村から林を抜け、さらに進むと、冷却水供給のために作られた人工湖があり、巨大な冷却塔と建築途中だった 5 号機と 6 号機が見えてくる。周囲には錆びついた大きなクレーン車が何台もそのままの姿で残されていた。

そこから 2 キロほどで事故のあった 4 号機とのことで、2016 年 6 月に完成したという新石棺が見えてくる。石棺とはチェルノブイリ原発 4 号機を封じ込めたコンクリートの建造物で、原子炉を遮へいするために事故後すぐに作られたが、老朽化による放射性物質漏れが懸念され、さらに大きなかまぼこ形の新シェルターで石棺を丸ごと覆ったものである。







周囲を回り、撮影ポイントとなっている モニュメントの前で車を降りる。新石棺の 効果か、ここでは 0.56μ Sv/h だった。

プリピャチへ

そこから車で 5 分ほど、もっとも原発に近いプリピャチの町へ行く。プリピャチは、1970 年、原発の建設と一緒に作られた人工都市で、原発関連の職員とその家族が住んでいた。模範的なソ連の都市とみなされており、15 の幼稚園、25 の商店、5 つの学校、カフェ、レストラン、病院、ホテル、河港、映画館、プールなど、充実したインフラを備え、事故前には5万人が住んでいたという。

原発事故をそうとは知らず、町の人々が そこから眺めていたという「死の橋」や線路 などを通り過ぎ、ゴーストタウンとなった 街中に車を止めて、散策する。レーニン大通 りのポプラ並木を通り、団地やホテルがあ る。あちこちに伸びた草木が生い茂り、犬が いる。裏手には開園前で事故が起こり、一度 も使われなかったという遊園地があり、観 覧車、錆びついた回転ブランコ、ゴーカート などがあった。 それから、文化施設が集まった建物があり、劇場、体育館、飛込台付きの大きなプールもあった。さぞかし立派な施設だったと思われるが、窓は破れ、むきだしの鉄骨は錆び、天井も床も壁も朽ちかけている。それから、小学校へ。黒板に白墨で名前と1986と年が書かれており、当時の小学生が戻ってきて書いたのだろうということだったが、机の上に置かれたガスマスクやピカチューの落書きは、観光客によるいたずらだという。プリピャチ川の船着き場にあるカフェを見る。ここも朽ちかけてはいるが、大きなステンドグラスの壁が残っており、洒落た場所だったのだろう。入口には古い自動販売機さえあった。





























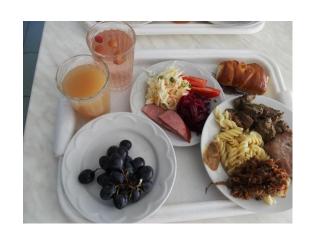








それから、原発で働く職員用の食堂で昼食をとる。建物を入ったところに放射能測定器があり、全身をチェックしてから食堂に入ることができた。多くの職員と観光客が当たり前のように同じ場所で食事をしていた。チェルノブイリは、現在も送電施設および廃炉作業の拠点として機能しており、多くの職員が働いている。





チェルノブイリ市へ

食事後、チェルノブイリ市の方へ戻り、重機を集めた広場へ。事故後、世界各国から寄付されたレスキューロボットだったが、放射線量が高すぎて、すぐにコンピューターが壊れてしまったそうだ。







「世界を救った人々に捧ぐ」と書かれた 消防士たちの記念碑。街の人が声をあげて 寄付金を募り、事故から十年後の 1996 年に 完成したが、資金不足でアマチュアが造っ たものだという。







事故がおき、修理のために持ってこられたまま放置され、少しずつ朽ちて沈んでいく「船の墓場」と呼ばれる場所を訪問後、チェルノブイリ教会堂へ。唯一残っている教会ということで、色とりどりの花が咲き乱れ、ここはよく手入れされているように見えた。









ニガヨモギの星公園

それから、「ニガヨモギの星公園」へ行った。ここは、事故後 25 周年を記念して作られた公園で、博物館もある。公園入口には、ラッパを吹く大きな天使像がある。ヨハネの黙示録第 8 章 10 節に、「第三の天使・・・黒い天使はラッパを吹き鳴らす。それによりニガヨモギの星を川に落とし、地上の川の三分の一を毒にする」という文章があり、チェルノブイリの地名はウクライナ語でニガヨモギを意味するということで、事故を予言したものとされたそうだ。ちょっと不思議な話だ。

公園には村の標識がずらっと並ぶ「記憶の道」があり、進んでいくと、郵便広場と呼ばれるところに青い郵便ポストがあった。 これは旧ソ連時代のポストで、失われた村の住所を書いて投函すると、村ごとの郵便受けに配達され、避難民同士が交流できるようになっているという。











それから、「福島の記憶」と名づけられた 広場に行く。赤と白の折り鶴 や、"HIROSIMA"、"FUKUSIMA"という文 字を象ったオブジェがあった。また、「ウク ライナ国と日本国、両国が負った大きな心 の傷が今後この地球上で二度と起きない事 を願うと共に、ウクライナ国と日本国、両国 のさらなる友好の証しに記念植樹をします。 2012年4月26日」と書かれた説明版があった。

ここには、福島の避難対象自治体の標識 を追加する計画もあるという。









サマショール訪問

その後、私たちは、チェルノブイリの小さ な商店で手土産を買い、車でサマショール の家を訪問した。クワポテ村(Kupovate) の農家のワシリさんとテチアさん (Lavrienko Vasili&Tetyana)だ。

強制避難先から最初に許可なく帰ってきたサマショールと呼ばれる自主帰還者は全部で2,000人程で、政府は対策をとろうとしたが、次第に目つぶるようになった。サマショールの現在の平均年齢は80~85歳で、ウクライナ人としてはかなりの高齢になると聞いていたが、私たちが訪ねたのは、次世代と言うべきか、60代くらいのカップルで、ワシリさんはここの出身であり、テチアさんは父親がここの出身、キエフから移り住んで来て1年だと言う。そんな人たちもいるのだと知った。

かれらの家は、水色や緑のペンキで塗ったの小さな木造で、庭には花が咲き乱れ、メルヘンチックに見える。テーブルの上には、大量のご馳走が並んでおり、サーロと呼ばれる豚の脂身を塗ったパンや採れたての野菜、魚のフライ、そして自家製ウォッカ。もう一組の観光客とガイドと一緒になり、ご馳走になった。ガイドは、「世界最悪の町に来てくれて感謝する」と言い、サマショールのカップルは、「今日のお客さんは笑顔では、のカップルは、「今日のお客さんは笑顔でくれて嬉しい」と言った。楽しそうな家族写真を見せてもらった。野菜、りんごや桃の木、たくさんのものが実る畑を案内してもらい、手作りウォッカやひまわり、野菜などたくさんの土産を頂いた。

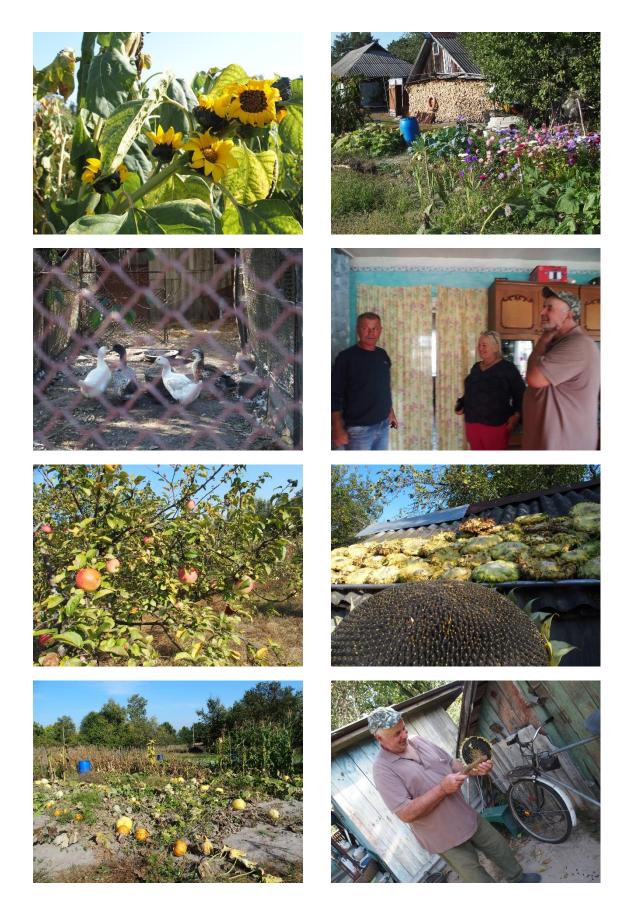
この経験をどのように消化すればいいのかまったくわからない。











ウクライナのホロコースト

オデッサのカタコンベ



キエフからオデッサへ飛ぶ。目的は、『地球の歩き方』に出ていた「パルチザン栄光の博物館」だった。私は、もともと人類の負の遺産をどのように扱うかに興味があり、原発事故関連ミュージアム以前に、ドイツやポーランドでホロコースト関連ミュージアムを何度も訪れてきた。プラハやブタペストなど、政権交代による展示内容の変化にはとくに興味がある。

ほとんど情報がないので、事前にいろいろ調べていたところ、ネット上にこのミュージアムに行った人たちの体験記がいくつか見つかった。オデッサは町の建築当時、千キロに及ぶ地下道を作り、その迷宮が後にナチス・ドイツに対するレジスタンスとして使われていた。その一部を博物館として公開しているという。ガイドブックには、個人では入れないので、広場のツアー売りに声をかけて申し込むか、宿でツアーを頼むようにと書かれていた。

宿のロビーに貼ってあった観光案内のカ タコンベツアーに申し込む。フロントの人 と話すが、どうも話がおかしく、このツアーが件のミュージアムかどうかわからない。 出発まで時間があるので、とりあえず、ミュージアムの住所を打ち込み、UBERを呼ぶ。 ドライバーがここはカタコンベではないというが、ほとんど言葉が通じず、30分かけてその地へ。ネットで見たのと同じ入り口だったが、鍵がかかっていて中に入れない。





やむなく、またタクシーで町まで戻り、申 し込んだツアーの集合場所へ行った。最初 はロシア語ツアーだったが、少し待つと女 の子の英語ガイドが来てくれ、予定より早 くツアーが始まる。

このツアーは7年前に始まり、3年前から盛んになった。それまではきちんと管理されていなかったので、自由に出入りでき、

落書きが多い。オデッサには巨大地下通路が張り巡らされており、3000キロとも6000キロとも言われている。もともとは坑道で、黄色石灰石を掘って地上に家を建てた。そこはいろいろな目的で使われていて、女性囚人の収容所だったこともあり、ソビエト時代の核シェルターだったこともある。

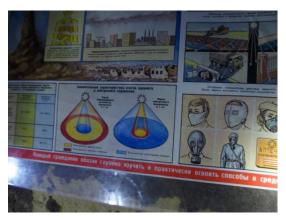
核爆弾が落とされてもこのようにしたら 大丈夫というポスターが展示されている。 ガスマスクは牛や馬など動物にも作られて いたが、猫にはなく、猫はソビエトに役に立 たないから差別されていたと言うが、冗談 なのか本気なのかわからない。それから、船 の美術館、後には坑夫たちが描いた船の絵。 6 日交替で地下に滞在するため、頭がおか しくならないように絵を描いたのだという。 タイタニックの絵もあった。タイタニック がオデッサ港に寄港したことはないが、オ デッサ出身の裕福なユダヤ人宝石商が乗っ ていて、助かったので、記念に黄金のタイタ ニックのミニチュアを作った。政治的理由 で脱出するとき持ち出せず、カタコンベに 隠して地図を作った。本人は帰ってこれず、 息子に託したが、見つけられないまま、黄金 伝説となっているという話だった。

途中、暗闇実験だと言って、懐中電気を消して暗闇を体験する。一定時間が経つと幻覚が出てくるのだそう。それから、ろうそくを灯してのティータイム。お菓子と紅茶。

関心を持っていたパルチザン栄光の博物館のことを尋ねると、それはソ連のプロパガンダなのだという答えが返ってきた。彼女が曾祖母から聞いたという話を聞かせてくれる。ナチスが物と家を接収にきたが、赤ちゃんがいるから許してと頼んだら、何も取らずチョコレートバーをくれた。ソビエ











ト軍はレイプに略奪、殺人。思春期の子ども までレイプされた。コルホーズ、ソホーズの 話。祖母は農園で働いたが給料はもらえず、 穀物少しだけ。工場で働いていた人も釘し かもらえなかった。その後、癌になって手術 したばかりなのに労働させられそうになり、 このことは誰にも言うなと言われた。英語 を話す若者は、他国に行ってしまう。自分も なぜ行かないのかと言われるが、ここに大 切な国があるのに、それを捨てたら後は誰 が面倒を見るのか。今はみな自分のことば かりしか考えない。学校ではそのような歴 史は教わらないが、ここで働くようになっ て、サークルに入って活動している。2014 年の革命以来、変化はあるが、これからどう なるのかわからない。彼女は23歳なのだと いう。何と言っていいのかわからない。

その後、公園まで行きブラブラしてポムチョキンの階段へ。途中、遊覧船のチケット(480円)を売っていたので乗ってみる。黒海だ。









バビヤールへ

帰国に向けてキエフに戻る。聖キリル修 道院の近くに、ホロコースト記念地である バビヤールがあると知り、夕刻に向かう。







1941年9月29日から30日にかけて、ナチス・ドイツとウクライナ警察により、3万3771人のユダヤ人市民がこの谷に連行され、殺害された。バビヤール大虐殺は、ホロコーストにおいて1件で最大の犠牲者を出した虐殺だという。その後も、数多の市民がバビヤールへ連行され、銃殺された。第二次世界大戦中、およそ10万人がバビヤールで殺害され、その大多数が市民であり、その多くがユダヤ人だったそうだ。

バビヤールの悲劇について、旧ソ連はユダヤ人虐殺という側面を強調することを嫌い、キエフ市民および旧ソ連に対する犯罪として扱った。バビヤールでは、ユダヤ人犠牲者を追悼する記念碑の建設が幾度か計画されたが、いずれも却下された。

1961 年、ロシアの詩人エフゲニー・エフトゥシェンコが『バビ・ヤール』を書き、これが、ショスタコーヴィチの交響曲第 13 番に使われたことは初めて知った。

1976年、バビヤールで殺害されたソビエト市民の追悼碑が公式に建設され、1991年のソ連崩壊後、ウクライナ政府はユダヤ人犠牲者のために新たに追悼碑を建設することを認めた。現在、バビヤール周辺には、さまざまな追悼碑が建てられている。



















今回の旅では、歴史的出来事を記憶し伝 承するミュージアムや記念碑が、いかに国 家の思惑によって左右されるものなのかを 思い知ることになった。政治体制が変われ ば、その内容や位置づけも当然ながら大き く変わるものだ。 日本において、敗戦後、一夜にして価値観が 180 度転換したことが当時の人々にどれほど大きな影響を与えたかは聞いてきたが、それは自分の想像をはるかに超えるものだったのだろうと改めて思う。

ウクライナは今、その歴史的大転換のさなかにある。チェルノブイリ原発事故とその事故処理、歴史における意味づけは政治体制とともにあった。街中にはまだまだ旧体制の跡が残り、若者たちを含め、ウクライナの人々は命がけで民主化を勝ち取ろうとしている。

冷戦後、世界のあちこちで起こってきたことであるが、日本ではこのような命がけの民主化運動はあったのかは疑問である。たしかにごく一部の人々は闘ってきたが、それは民衆に支持されることなく弾圧されてきた。そう考えれば、日本は本当には独立国ではないのではないかと思えてくる。原発政策をやめられないのもその表れなのかもしれない。

コミュタン福島の衝撃から始まった旅だったが、ミュージアムを市民の手で良いものにすることは、政治的なことと切り離せないのだ。

つづく